

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

とある魔術の恋色光線

## 【作者名】

白波

## 【あらすじ】

とある事情から夜中の博麗神社を訪れていた魔理沙だったが、気が付いたら学園都市なるところに来ていた。元の世界に戻る方法を探しながら、都市で出会った御坂美琴や上条当麻とともに事件に巻き込まれていく。科学と魔術と普通の魔法使いが交差するとき、物語は動き始める。

## プロローグ

夜中、博麗神社の境内は静まり返っていた。

この神社の住人である博麗の巫女と鬼が眠っている中、一人の人物が神社を訪れていた。

「それにしても今日は冷えるぜ」

魔女を思わせるような白黒の服を着た“普通の魔法使い”霧雨魔理沙は、身体をぶるぶるとふるわせながらほつきから降り、縁側の方へ向かった。

ほつきを片手に歩く彼女の首からは烏天狗から“借りてきた”カメラが下がっていた。

そもそも、彼女がなぜ、こんな時間に神社を訪れているのか？

そもそもものきっかけは、山の巫女にあった。

\*

さかのぼること数時間前。

魔理沙は、守矢神社を訪れていた。

「寝起きドシキリっ」

「はい。昔、テレビで見たことあるんですけど、アイドルや芸人さんの意外な素顔がみれて面白かったですよ」

わきの露出した青色の巫女服を着た守矢神社の風祝、東風谷早苗は目を輝かせていた。

「どうしてまたそんな話を？」

「いや、霊夢さんに寝起きドッキリを仕掛けたらどうなるのか気になりましたして……やってくれませんか？ 一応、カメラは新聞に使うという条件付きで借りられそうなので」

「なんで私がやるんだよー！」

「誰も一人で行ってくれなんて言ってますよ。博麗神社の賽銭箱の前に夜明け前に来てください。私も行きますから」

「本当だろうか？」

「ええ。本当ですよ」

そう言って、早苗はニコリと笑みを浮かべた。

\*

その後、山を下りるついでに烏天狗からカメラを借り、軽く使い方を教えてもらって今に至るのだ。

そもそも、写真はカメラの持ち主である烏天狗がとればいいと思うのだが、早苗はどうしても魔理沙が写真を撮る方がいいというのだ。

まったく持って意味が分からない。

そんなことを考えているうちに賽銭箱の前に到着した。

わざわざ、境内に入るところでほうきから降りたのは早苗の指示だ。

何でも、相手に気づかれて起きてしまったては終わりなので物音をで  
きるだけ立てたくないのだという。

別にそれはほうきに乗って来ようが、来なかつても変わらぬ気が  
するのだが、それを踏まえたとえでそうした方がいいと早苗が迫つて  
きたのだ。

「それにしても遅いぜ。それとも私が早すぎたのか？」

夜明けまではまだ、時間がある。

魔理沙は賽銭箱の前に座つて休むことにした。

「にしても、こんな夜中だからか、少し眠いぜ……」

気づいたら、魔理沙は眠りについていた。

\*

魔理沙が博麗神社に到着してから約30分後、遅れる形で早苗が到  
着した。

「あれ、魔理沙さんまだ来ていないみたいですね」

そんなことを言いながら、賽銭箱ではなく近くの茂みに隠れた。

彼女の手には、守矢神社の奥で眠っていたビデオカメラがあった。  
もともと、故障して動かなかったのだが、知り合いの河童に頼んで  
修理してもらつたのだ。

「あやちゃちゃ。もしかして、それが噂のビデオカメラつてやつです

か？」

そんな早苗の横にいて、ビデオカメラを覗き込む少女がいた。白い半そでシャツにフリルのスカート、赤い高下駄をはいているその人物は、本来ならその場にいないはずの烏天狗、射命丸文である。彼女は興味津々といった様子で早苗の手元を覗き込んでいた。

「はい。そうですね。これで魔理沙さんへの逆ドツキリの一部始終を収めます。まあ霊夢さんに協力を仰ぐのが大変でしたが、それだけに完成度は高いはずですよ」

「それは楽しみですね。これで、つまらなかつたらわざわざ大切なカメラを貸した意味がありませんし」

「ええ」

もちろん、これをやるうえで魔理沙には、自分がドツキリを仕掛けている側だと思わせるためにいろいろと工夫をした。

まず、上から見られて、自分たちがいるのがばれてしまったら元も子もないので、適当なことを言っておいて彼女には境内に入る時点でほうきから降りるように強く言っておいた。

霊夢に対しては、何が起ころうが“寝たふり”を続けてくれと頼んである。

あとは、ビデオカメラを文に託して、魔理沙と一緒に博麗神社に入るだけだ。

「それじゃ、私は行きますのでお願いしますね」

「はい。了解しました！」

元気よく敬礼する文に軽く手を振り、茂みを出て歩き出す。

そもそも、この企画自体、諏訪子が霊夢か魔理沙が死ぬほど驚いているところを見てみたいという何気ない一言で始まっているとはい

え、失敗するわけにはいかない。

しかし、賽銭箱の前まで来た早苗が目撃したのは、先ほどまで魔理沙がそこにいたと物語るようにおかれていた文のカメラのみであった。

## 1話 二人の少女

学園都市。

日本の首都東京の西部を開発して作られたその町の住民のほとんどは学生で、日々能力開発を受けている。

しかし、人口230万人のうち約6割の学生は能力を使うことのできない無能力者である。

仮に能力を発現することが出来たとしても、そのレベルはまちまちで、スプーン曲げができるだとか、日常に対して影響を及ぼさない低能力者から、能力の応用の範囲が非常に広く、一人で一国の軍隊に相当するといわれている超能力者までのレベルが存在している。

つまりは、この都市の学生たちは無能力者から超能力者までの6段階に分けられるのだ。中でも最高位に位置する超能力者はたったの7人しか存在しないというのが現状である。

さて、そんな学園都市の夏休み初日。

うだるような暑さの中で『上条ちゃんバカだから補習でーす』と担任からラブコールがかかってきてしまった。

ウニのようにギザギザの頭をした少年、上条当麻はため息をつきながら布団干しを始める。

彼は学園都市の人口6割を占める無能力者の一人である。

ここ最近、いたるところでたった7人しかいない超能力者に勝負を吹っ掛けられ、ある意味全戦全勝しているのだが、上条当麻という人物が無能力者という事実には変わらない。

実をいうと、布団を干しにベランダに出る段階で彼をちょっとした

不幸が襲ったのだが、それはあえて語らないでおこう。

「まさか、夕立なんて降らないよな」

いい天気ながら、また不幸に襲われるのではないかと不安になる上条であったが、気を取り直して布団を干そうとする。しかし、ベランダに出てみると、なぜか手すりにはすでに「二つの」布団がかかっていた。

一つは白。もう一つは黒である。

「はっ？」

上条当麻は一人暮らしだ。

同居人など存在しない。しかし、目の前にあるのは二つの布団……いや。

どういうわけか手すりに引っかかった二人の女の子であった。

当麻の手から布団が滑り落ちる。

だって、そうである。ベランダに女の子が引っ掛かっているのだ。それも二人。これ以上に不可解なことなどない。

「シスターさんとコスプレイヤーか何かか？」

おそらく、二人とも年齢は十代前半と言ったところだろう。

片方の女の子は、銀髪で教会で見るとような修道服を着ていた。ただし、彼女に限っては服の色が黒ではなく、純白で服のあちらこちらの錦糸の刺しゅうが施されているのが確認できた。

もう一人は金髪でつばが広く黒い三角帽子、黒い服に白いエプロン。ご丁寧に彼女のそばには竹ぼうきが転がっていて、どこぞの物語で出てきそうな魔法使いを思わせるような恰好をしていた。

二人を前にして、当麻が唾然としていると黒い方、コスプレイヤーと思われる方の少女が目を見ました。

「いたたたた……ひどい目にあっただぜ」

少女は軽く体を揺らしながら上条家のブランドに足を付けた。その際少し飛んでいたような気がするのはいのせいだろう。

すると、それとほぼ同タイミングでシスターの少女も目を覚ました。

当麻は思わず「一、二歩後ろに下がってしまっ」。

足元でぐしゃっという音とともに焼きそばパンがつぶれたようだが、そんなことは気にならなかった。

「……おなか減った」

やはり、彼女は外国人なのだろうか？

おそらく、必死になって覚えた日本語をしゃべったにきまってる。

「おなか減った」

少女は、再び自らの欲求を口にする。

しかし、当麻は動けない。

「おなか減ったって言うてるんだよっ」

「おい！……どこの誰だか知らないけれど、こんなに訴えてるんだから何か食わせてやれよ」

当麻がずっと固まっているからか、耐えかねた様子でコスプレイヤーの方が当麻の方へと歩み寄ってきた。

「いや、ひょっとしてあなたたちはこの状況で行き倒れだともおっしゃりたいんでせうっ。」

「そこだよ」

どっちら、日本語ペラペラのようだ。

当麻の足元に転がっているぐにゅぐにゅの焼きそばパンが視界に入る。

「この子にはどっか遠いとっろで幸せになってもらおう。」

踏まれていたせいで焼きそばパンとは思えないような匂いを放つそれを少女の前に差し出す。おそろく、これを見ればどこかへ行ってしまうだろう。

しかし……

「ありがとうございます。そして、いただきます」

少女は、当麻の予想に反し焼きそばパンにラップごと……おまけに言えば上条の手もろともかぶりついた。

「ぎゃー！ 不幸だー！」

それとほぼ時を同じくして当麻の叫び声が学生寮にこだましたのだった。